

地球

第三卷 第二號

大正十四年二月

刀劔の地理的研究

小川 琢 治

一 緒 言

刀劔は日本國民には單に武器たる以上の崇高な意義を有することは多言を要せぬ。之を上にしては我が皇室の神器となり、之を下にしては武士の魂となつて、廢刀令が布かれるまで常に殆んど神聖な物となつて來て、今でも我々には他の器械に對すると異つた態度で之を視つゝある譯である。全國に刀劔の保存に熱心な人士があつて刀劔會が到る處に興されて、その鑑賞は恐らくは廢刀令以前の武士の間に行はれたよりも却つて進歩してゐると思はれる。

今我々が茲に述べんとするのは此の如き鑑賞といふ立場からでなくて、之を文化民族の生産物として如何なる意義を有し、其の地理的分布が民族の生活及び活動と如何なる關係を有するものであるかを研究せんとするのである。

劈頭に讀者に斷らねばならぬことは、茲に述べる所が昨年七月以後消夏の一具として刀劔に關する古今の刊行圖書及寫本と少數の實物とを對照して、批判的態度で文獻に見えた日本刀劔の銘文に就き研究して獲た最初の收穫に過ぎぬことである。立派な實物を囑目する機會なく、鑑定識別の經驗もなしに見當り次第に手に入れたものに立脚したのであるから、他日更に進んで研究を續けたらば今筆を呵して作つた所を如何に修正せねばならぬかを豫想し能はぬのである。

一見すれば全く平生手にかける材料と懸隔し、殆んど風馬牛相關せざる如きものに敢て指を染めるに至つた動機の一は、世の愛劔家の研究の方針方法を觀るに、武士の身を防ぎ國を護る武器として實用を目的とした幕府時代と同一の態度を今尚ほ執るので、刀劔その物の良否に重きを置き文獻としての價值を十分に顧みない人士が少くない様であり、又一方には他の文獻を蚤取眼で搜索する歴史家が信用すべき金石文に乏しい平安朝以後に於て年月場處を鐫り附けた刀劔銘なるものの地方開發の紀念物としての價值を無視して、未だ曾て是から導き得る合理的の結論に想ひ到らぬ様に見えるからである。

主として日本刀劔に關して論述するに當つて、順序として先づ文化民族の生産物としての一般の武器の意義を一考せねばならぬ。

武器の文化史上の意義は喋々するまでもなく、文化の極めて低級な民族に於て既に最も重要であつたことは文化の程度を區別する石器時代とか青銅時代とかいふのが、主として使用した武器の原料の性質に基いた一事で明かである。今日の世界の文化民族中に雄を稱する英國のアームストロングの在るニューカッスル近傍のエルスキックとか、佛國のシュネイデの在るサン・テチエンヌ近傍のクルーズーとか、獨逸のクルップのあるエッセンに比すべきものを過去に溯れば終には石器時代の石鏃の原料たる黒曜石を産出する地中海中のミロス島に達し、某英國考古學者は此の島を呼んで石器時代のシエフキールドといつたと濱田青陵博士から聞いたが、その前に我々は既に備前長船を平安朝から室町時代の間のエッセンと呼んでよいと考へた。

談偶ま此の問題に入つて同博士と二人で我國に於ける石器時代の此の如き地點を數へ來つて、和田峠の黒曜石を原料として、諏訪湖が石器時代文化の一中心となつた外に、二子山熔岩の原料産地に近い河内國府の臺地（濱田、喜田兩博士と共に自分の多數石器時代人骨を發掘した處）の如き、馬蹄石を産する隱岐の島前島の如き、同じ原料に富む周防灘の姫島の如き、何れも今日では想像し難い重要な意義を持つてゐた筈であるとの結論に達したのである。

上古の支那民族の寶劍は玉で造つた所謂赤刀の類であつて、彼等の崑崙を極樂世界と看做した由來は明かでないが、この迷信的崇拜の根柢には支那民族に最も貴重視さるゝ玉の産出があつたらう。

と想はれ、又た肅愼即ち今の滿洲で周代に石鏃楷矢が使用され、蒙古からは庫倫の南から故成田安輝氏が瑪瑙製石鏃を將來されたが、黒曜石の如く石鏃製造に便利な原料の缺乏する支那では、殷墟其他の發掘品に見る如く主として骨鏃が之に代用されてゐることが滿洲・蒙古・日本・地中海地方等に比して面白い對照といはねばならぬ。

青銅文化の時代に入つてフェネシア人が銅に混する錫の原料產地として今の英國コーンウォール海岸まで探險船を送つたのも亦た主として青銅武器製造の必要からであつた筈で、鐵鏃の供給に苦心する現今の文化民族の場合と趣を同くしたものと認められる。

支那の銅器の古いのは三代(夏殷周)の物といふが、夏后時代は全く石器時代に屬し銅器は多分殷代後半以後に西方から支那に入つたものと見え、近頃發掘せられた殷墟の器具は殆んど全く石、骨、牙、等と土器とのみであつた。支那で銅器を使用し始めた年代を西亞及び地中海沿岸地方に比較するに、假りにデューソー、ヘルネス等の説に従ふとすれば、少くも數百年は支那の方が後れてゐる。

又た支那で發掘する青銅劔を西亞以西のものに比較するに其の細微な部分まで様式が殆んど同一で單なる偶然の一致とは考へ難いものである。後世銃砲が葡人來航と共に東亞に盛んに使用された如く、西方に發明された青銅の利器が東漸して支那に傳つたと考へる方が、支那人自身に單獨に發明したとするよりも事實に近いと想はれる。

古代支那の宗教的信仰の中心たる崑崙に就いて研究して見た時に、其の原始的概念から現實化するに當つて、全くバビロンを極樂世界の具象的表現として居るらしく感じたが、今筆を執り青銅輸入を論ずるに當つて、當時想ひ着かなんだバビロンの神話傳説の輸入も或は此の如き實物の傳來と略ぼ徑路を共にしたのでないかと考へることになつた。此の論點を支持するに足る確乎たる證據を擧げることは困難であるが、最も遠方まで傳播する勢力を有するものが醫藥と武器であることは何時の時代何れの地方にも共通した事情であるから、漢代よりも以前に此等のものが輸入されたとするものが自然的の考へ方であらうと信ずる。

鐵は如何といふことが次に起る問題である。鐵鑛に豊富な支那のことであるから、銅や金銀と共に餘り時の前後の差なしに、支那で發見され精鍊されたと想はれるが、青銅よりも硬度の高い銅を造ることは恐らくは戰國時代には未だ十分に發達してゐなだらしい。濱田博士が横斷面を造つて知られた如く、所謂銅鑞即ち青銅鑞の中心（ナカゴ）は軟鐵で造つて、それより硬くて貴重な青銅は鑞そのものだけであつたのから推定するに足るのである。従つて始皇が金人に鑄た兵器はすべて青銅で、何時でも必要があれば再び武器なり貨幣なりに造り變へ得る積りで貯藏した意味も含まれてゐたらう。

此の如く支那に於ては青銅を武器として使用した時代が明かに認められるが、日本では銅鑞の發

掘は殆んどなく、九州邊に出る銅鉾が此の種の武器として或る範圍まで使用されたに止るらしい。是は恰も石油燈から瓦斯燈の普及を見ずに一躍して電燈が一般に使用されたと同じく、石器を使用した日本の民族が大陸文化に接觸する時には、大陸は最早青銅時代から鐵(鋼)の武器を使用する時代に進んでゐた、即ち約二千年前後に交通が頻繁となつたといふ事實を語るものらしい。石器時代の遺跡の如く青銅時代の文化中心たる遺跡を發見することがない譯は此の如く解釋すればよいのであらう。

更に進んで鐵(鋼)を武器として使用し始めた後の日本刀劔を對象として考へるのが、今茲に述べんとする問題の主眼である。

三 日本刀劔の變遷

刀劔は形狀からいへば突くのを主もな目的とする戈や槍の如き長柄のものを縮めて接戦格闘の時に使用する劔と截るのを目的とする庖丁や鉈に似寄つた刀との二種に別れる。然れども劔と雖も、突き易いと同時に截ることが出來ねば接戦の時に不便であるから切刃を腰から上に附けた形式が東西兩洋を通じて石劔銅劔にも既に行はれてゐた。之に反して切ることを専らとする刀の方は石庖丁又は石鉈と呼ぶべきものから發達したらしく、其の證據は刀鉈と似た形狀の玉刀赤刀が支那で發掘されて居る。鐵刀に至つて切先を尖らして突くことの出來る形狀が普通になり、初めは直刀で後に

は反りの附いたもの即ち現在の日本刀の形狀のものが造られた。其刀は玉石の刀から出た古い形狀で、古墳時代から王朝を通じて行はれたらうが、其の使用法を考ふるに初めは幅の廣く重ねの厚いものに切刃を附けて敲き切るものであつて、其の長さは幅に比して短く、鍛刀の方法が幼稚で減多に折れぬ様になつてゐたと想はれる。

反りのある刀の利益は刃が斜めに物體に當るので刃の兩面間の眞の角度よりも小さい銳角になつてよく截れることになるのである。京、大和の短刀は突く目的であるから、其刀の形狀が後まで續き、鎌倉時代以後に短刀も少し反つたのが造られた。反つた短刀が此の頃から多く造られた理由は明かでないが、試に推測すれば格闘して敵手を刺し殺した後に其首を截る時に都合が好いので、敵の首を揚げるのを功名手柄とする爲めに此の如き形狀の殺伐の氣を帶びたものが流行したのであるかも知れぬ。

此の日本刀の反りといふものは恐らくは中亞波斯邊に先づ行はれて大食(アラビヤ)土耳其等のシユミタルといふ曲刀に倣つたと考へられ、其支那へ輸入されてゐたことは遼陽驛で水道開掘の時に發掘された實物が二本まで現に京都大學文學部陳列館に保存されてゐる。此の刀と共に出たものが確實に知れないので其の時代を確定し難いが、遼陽の開けた時代から推して隋唐の間のものであらうと考へられる。滿洲は渤海國の領土であつたから、日本と交通した渤海時代に日本から輸出した

ものであらうと言ひ得られぬでもないが、古い石佛の諸天などの中に既に曲刀を持つてゐるのがあるから、東亞に出る曲刀を日本で發明したと主張する根據は薄弱である。

曲つた日本刀の形狀について尙は考ふべきは平造と鑄造との區別で、仰木伊織著古刀銘盡大全（卷一）に利劔を二等分して鑄造とし、寶劔を二等分して平造としたといふのは面白い説であるが、穿ち過ぎた考へ方であつて、截斷を目的とする鋭い刃を附けるには切刃が最も簡單で、初めから平造の長い刀が造られたと考へ難く、現に大和京備前の古いものは大抵鑄造が多く、鎌倉以後に平造の太刀が多く造られたのである。故に古くから絶対に造られなかつたのでないことは正倉院御物中にあるので明かであるとしても、之を寶劔の形式から導かれたとして、原始的形狀に既に二種の區別があつたことには賛成し難い。

最後は鍛刀の方法であるが、折れにくい軟い鋼の刃の部分だけ焼淬によつて硬くして切れる刀とするのは一般に必要缺く可からざる手續である。直刀では幅重ね（厚さ）丈夫であれば敲き截するには十分であつたらうが、平安朝に入つて奥州の蝦夷征伐の時に戰鬪が屢行はれ、且つそれが騎戰となつたので、馬上で使用する長い太刀の必要を生じて、三尺以上の長いものを造らねばならぬことになり、其結果として幅重ねを犠牲にして寸を延ばすので、簡單な丸鍛へでは折れ易くて用に堪へぬから、折重ねた薄い鋼葉の癒合する鍛挫法（山田睦政著古今鍛冶考卷一）に依らねばならぬことになつ

たのが、日本鍛刀法の進歩の徑路であつたかと想はれる。反りの強い細長い刀が此の時代の必要から生れて、馬上の武士に此の上もない利器として珍重されたのが陣太刀とか野太刀といふ長物である。

此の鍛挫法の特長は硬度の異つた薄層から成つた刀身であるから、多少曲つたり反つたりしても折れにくくて折れる前に縦の棟割れが出来るのが普通である。又た丸鍛に比して北國の極寒の時に容易に折れぬといふ特長もある。出羽國月山物の特長とせられた綾杉肌又は月山肌といふ杢目立つた刀身の造り方が奥羽地方に發達したのは氣候の影響が鍛刀法に現はれた面白い實例で、山陰で戰國末の刀工の打つたものにも此の如き肌のあるものを見た。

今述べた鍛挫法が蝦夷征伐によつて發達したとする考説は次に述べる奥州物の起原に關する研究から殆んど疑のない所で、日本の鍛刀術は他の工藝と同じく支那交通によつて最も古く大和に發達し、平安京が出来ると共に京三條物が現出し、又た鐵鑛の産地に伯耆安綱の如き名工が出たとし、傳說的刀工天國なるものが大和にゐた最初の名工とするのが現今普通の説であるが、後に述べる如く早く盛んに刀劔が製造されたのは恐らくは戰爭の行はれた現場の奥州であるべきは容易に想像され、之に反して近畿中國等の刀工は海賊純友の出た前後から刀劔製造が盛んとなつて出て來たものとし、後に述べる如く備前伯耆等に多數の刀工が出たのは恐らくは奥州の刀工より後れてゐた

と推測され得るのである。

保元平治以後平安京及び近畿地方が戰場となり、鎌倉幕府が關東に勃興した後の日本に比すれば其の以前の奈良平安兩京が中央集權の位置を占めた時代の鍛刀法に判然たる地方的特色が既に認められるや否や、知れた確實な作品が少くて目に觸るゝ機會のない爲めに之を斷言し得ない。が恐らくは奥州物が自然に其の模範となつて京大和備前等の平安朝作品には未だ互に著しく相異するまでには至らず、備前に於ける鍛刀工業が盛大となつた平安朝末平家時代に至つて初めて奥州物を凌駕し、鎌倉時代に入つて後鳥羽院に召し出された所謂番鍛冶の多數は備前系の良工たる盛況を呈したのであると考へられる。

之に續いて鎌倉幕府の所在地に京備前の良工が招き集められることになつて、行光正宗等が從來の鍛刀法を改變して、次第に防禦の方法の進歩し來つた堅甲を斫るに適當する武器の作風はやがて天下を風靡して、備前に於てすら兼光長義等の如き相州風を學んだ刀工を出し、其の後南北朝室町幕府時代の鍛刀工業は三備が依然として盛んである外に美濃の關の如き盛大な武器を供給する地方的工業も興つた。

今日古刀と稱する慶長以前の刀劍の大多數は南北朝以後に屬し、殊に戰國時代にあまり有名でなくして而かも實用に適する切れ味のよきものを作る刀工は各地方にゐた。此の末が慶長以後の諸藩

の刀工となつたもので、此の新刀の有名な作者は京、大阪、江戸を首めとし諸大藩の城下で鍛工業を續けた。

以上述べた所で略ば日本に於ける刀劔製作の發達した歴史的徑路は明になつたから、次に其の地方的分布に就いて述べるに當つて、

四 鍛刀工業の地理的要因

に就て一考せねばならぬ。是は原料の供給と製產品の需要とであるとはあらゆる他の工業と同じが、其の性質は他の生活に必要な物質と異つて、戦争の準備に伴ふ需要であつて、従つて此の要件の存在せぬ處には盛んな工業が成立し得ない。従つて平安朝の主要製産地は京の首府として成立する外は鐵鑛産地たる奥州舞草、備前長船、伯耆大原の如き處で、平安朝以後盛んになつた大和奈良の千手院の如き豊後の彦山の如きは、僧兵が集つたのと諸國の旅人が來賓して市場を成すので、神佛の崇拜と關係し、又た旅客往復の頻繁な處にも盛況を呈して中仙道の街道に近い關とか、筑前博多備前三原の如き港であつた。南北朝頃に至つては此等の各地の外に肥後の菊池豊後の大友の如く京の根來大和千手院等の良工を招いて兵備の爲めに此の工業を興した處も出來た。

特に面白い一例は交通上から見て極めて僻遠の地たる紀州入鹿一派の刀工の居た熊野北上川の寒村で、此處が吉野から熊野灘の海岸に達する捷徑に當るが爲めに存立し得たのであつて、其以前に

既に居たならば恐らくは熊野堪増などに武器を供給するだけであつたらうと想はれる。

九州に於て薩摩の突角たる谷山の波平に於て南北朝以後に興つた鍛刀工業は南北兩軍の戦闘に必要な爲めに海岸に砂鐵の在る處に成立したうが、其の盛況は恐らくは八幡船と關係し、平戸諫早等と共に刀劔を海賊に供給し又た海外に輸出したので存立以上の好果を收めつゝあつたらう。

之に反して鎌倉に於ける鍛刀工業は日本刀の作風を一變した程の進歩を示したに關らず、北條氏没落の後には萎靡して鎌倉鍛冶の數が關などに比して遙かに少いのは一奇である。是は所謂形勝の地であつても、交通の要路でないので幕府没落後多大の需要を見ずして次第に衰へたものである。

北條早雲が小田原に據つたので末相州物の一派が稍榮えたが、鎌倉から移らずして駿州島田義助一門のものであつたことは關東の管領の勢力が萎靡して振はぬと共に鍛刀工業も地を拂うた状態を想はせてゐる。

鍛刀工業の盛衰を支配する最も重大な要因が戦争であるべきは勿論で、奥州の戦争が最も古い日本刀の製造を促した以來、海賊純友等の瀬戸内海及び西海地方に起つて中國筋鍛刀工業の隆盛を促し、引續いて源平兩家の争覇戦や承久弘安等の内外戦争の準備が備前鍛工の手で行はれ、南北朝以後は終に絶えず地方豪族の闘争を見るに及んで最も三備の刀劔の需要が盛んとなつて、現存古刀の大部分が備前物の系統たる隆運を見たのである。

備前に次いで濃州關の鍛刀業が東國筋全體を通じて最も盛んであつたのも、近畿を中心として保元平治以後の戦争が行はれ、六波羅探題の如き鎌倉から出張した武士に供給する刀劔が此處で造られる關係に起因し、其の後まで近畿以東に武器を供給するに便利な位置の關係が續いたのに在ることは疑を容れず、特に織豐徳三氏が踵を接して興つて天下を統一する優争戦をした間に使用した刀劔が主として此處から供給したので繁榮した譯であらう。

最後に一考せねばならぬのは戦争によつて生ずる刀劔の破損とその手入れである。刀劔の鑑定家は繼忠と稱するものを非常に嫌ひ、全く異つた刀身と忠とを接合した贋造品として扱ふ様である。其の實例としては然るべき新刀に在銘古刀の廢物の中心を繼ぎ合せたものが舉られてゐる。

多數刀劔の鑑定に當つては此の如き贋造品に出會ふ機會が多く、大に警戒すべき親切な注意といはねばならぬであらうが、此の一事を過重視して、すべての繼忠を惡意の偽造に係る如く考ふることは出来ぬ。

繼忠は刀劔の重大な疵であつて、其の價值は完全なものに比較にならぬのは勿論であつても、破損した良刀に手入をして再び使用するのは當然のことで、特に家重代の刀を使用して功名を獲た後に之に修繕を加へて愛藏するのは武士の義務であり、又た戦場で敵の首を馘つた時にその佩刀を分取つて手入れをして保存するのも當然起るべき所である。戦場で刀身の平に強い激動を受ければ鏝

元から目貫穴の處に棟割れが出来るもので、其の輕微な場合には單に此の部分を焼いて、打鍛へて中心を磨上げただけで再用に堪へるから、此の如き手入は戦争を経た古刀には寧ろ極めて普通である。棟割が長ければ已むを得ず、其の部分を切去つて磨上げ、又はそれでは短くなり過ぎる場合には其先に原との中心を繼ぐのである。元和大阪陣の戦争の時まで、即ち長い無疵の刀を磨上げて短くして殿中用の脇料として立派な拵を施すに至つた以前の古刀の大部分は此の如き手入物が多數であつたと見えて、良品を手にする機會の少い我々の目に觸れる古刀には殆ど手入物でないのはいといつてよい。

繼忠の面白い一例は伊勢大神奉納の藤原秀郷の毛拔形の櫛を成した部分と刀身とは繼ぎ合せたもので、他の例は大宰府の焼け物の毛拔形太刀も同じく繼忠で、繼目から彈じてゐるとの話を保之助から聞いた。此等の實例から考ふれば實用に差支ないものとして製作の初から繼忠を拵らへて怪まなんだ譯で、従つて平安朝以來丈夫な繼忠を造る方法は刀工間に行はれてゐたと考へられるのである。故に繼忠を絶対に排斥することは獨り古い作品を滅亡せしめるのみでなく、謬つた見地に立つた鑑定法と極言し得るかも知れぬ。

此の如く刀身と忠とが同一體であれば、繼忠でも其の刀工の作風は大體窺はれる譯であつて、銘文を文獻として取扱ふ上には此の如きものも時代と作者に相當する價值があるべきで、又た假令偽

銘を後に切つてゐても、正銘が讀めれば刀劔書に押形の見えぬ刀工の作品が発見されて刀劔史料として貴重なものとなる。磨潰された正銘を検出することは一寸考ふれば殆ど不可能と想はれるべきも、自分の研究した所では鍛刀作業中に刀身から忠へかけて切つた草紙銘(自分の命名)と完成後の清書銘(同じく)とは後に切つた偽作の追銘と區別され得るもので、幾多の追銘があつても、刀身の草紙銘と一致する正銘を擇めばよいのである。自分の経験は未だ狭いが此の方法によれば所謂無銘刀の正銘を発見し得る場合が頗る多いと確信してゐる。此の銘文研究法は本年一月の史林(内外出版會社發行)に略述し、本論の問題外に逸出するから茲に詳述せぬ。

日本刀の一般的考察は此で止めて鍛刀工業發達の時代の順序に従つて主もな刀劔産地に就いて記載を試みることにし、次號に最も古い奥州舞草物から始める。

但し此の研究は半歳の短時日に過ぎずして、刀劔の實物に關する見聞が極めて狭く、未だ産地の現場を調査する暇がなく、此に公にするのは關係地方の讀者の注意と感興を喚起して過去のクルーゾーたりエッセンたる工業地の遺蹟を詳細に調査せられ郷土誌の材料を蒐集せられるのを希望する趣意に外ならぬ。(第一稿次號完結)